北海道サケネットワーク
ニュースレター　9
09．10．5

・　秋サケの予測と来遊（北海道立水産孵化場）
・　石狩川の魚道を見よう、考えよう（大雪と石狩の自然を守る会）
・　団体名の変更と会員移動（泊村漁業協同組合）
・　事務局便り

今年(平成 21 年)の秋サケの予測と来遊について

（平成 21 年 10 月 5 日）
北海道立水産孵化場長　河村博

そろそろ高い山々に初雪のたよりが聞かれ、里山にも霜がおり、森や林を舞う小鳥たちもこれからむかえる厳しい冬に向かって、さかんに餌をとるようすが見られる季節になりました。北海道はこれから短いけれど濃密な秋の気配におおわれます。今年の秋は、すこし昨年とは様子がちがうようです。昨年は集中豪雨が本州を襲い、大きな被害にみまわれました。北海道は台風による被害はなかったものの雨が少なく、したがって川の水量も少なく、秋の降雨増水により川への遡上が促される秋サケ親魚の捕獲も思うようにいきませんでした。何より、昨年の北海道の秋サケ資源はまれにみる不振で、来遊数は 8 年ぶりに 4000 万尾を下回り、増殖用の親魚の捕獲数が計画数に満たない地区もあったほどです。

さて、今年（平成 21 年）の秋サケの来遊はどう展開することでしょうか。漁業者のみなさんのみならず、加工業者、流通業者、販売業者、そして消費者ほかのみなさんの興味と疑問が尽きないことと思われます。北海道立水産孵化場では、毎年、その年に来遊する秋サケの資源予測を行っています。それによると今年の資源予測は、全道で 2500 万尾あまり、近年まれにみる低い水準になると予測しています。今年の秋サケ漁が始まってまだしばらくの状況ですが、事務局からの依頼もあり、来遊の現況などについて触れてみようと思います。

9 月末現在の全道の秋サケ漁獲量はおよそ 6 万 4 千トンで、昨年の同じ時期と

くらべて 30%ほどの増加です。一方、９月末の親魚捕獲数はおよそ 78 万尾で、昨年同期より 15 万尾ほど多くなっています。今のところ、秋サケの来遊数は昨年実績を上回っています。その要因は、沿岸水温が昨年に比べて低く、秋サケがスムーズに回遊できたこと、まだ確定していませんが、昨年 3 年魚としてきわめて低いレベルであった今年の 4 年魚の来遊が好調に推移していることが考えられます。しかし流動的な状況の下で確かなことはいえないのが事実です。このまま、昨年を上まわるペースで秋サケが回帰して、予測が高くはずれることを期待せずにはおられません。

ところでサケネットワーク会員の方々で、秋サケの資源予測の方法について知っている方はいらっしゃいますか。ここでその中身のエッセンスをご紹介しましょう。

資源予測の作業は当然のことですが、科学的なデータ、客観的なデータが基礎になります。秋サケ資源予測では、基幹河川に遡上したサケの時期別の年齢組成が基礎データとなります。それに、沿岸漁業協同組合の市場に水揚げされたものが加味されます。サケの年齢はご存じの方も多いと思いますが、ウロコに形成された輪紋（木の年輪に似ている）の年齢表示を、専用の装置で拡大した像から読み取ります。このようにして導き出された年齢組成（ある川に遡上したサケの 2 年魚、3 年魚、4 年魚、・・・の占める比率）を基礎にして、ある地区に来遊した秋サケの年齢毎の来遊数が計算されます。そして、その年の年齢毎の来遊実績値と昨年の実績値に基づいて、ある一定の兄弟関係、たとえば 3 年魚と 4 年魚あるいは 4 年魚と 5 年魚の関係式から、翌年の来遊予測値が求められることになります。ここで予測値は一定の信頼幅をもって示されますが、資源予測として公表されるのは、関係式上の値（点推定値）であることから、〇〇万尾として公表されるわけです。

さて、このようなある一定の兄弟関係が成り立つには、秋サケが生活する環境が一定の枠の中で落ち着いていることが前提となります。最近みられるような資源の大きな変動、すなわち、3000 万尾台から 5000 万尾台の変動は、秋サケが利用する環境に変化が起きていることを予想させます。事実、回帰してくる秋サケの体サイズが小型化したり、高齢化したりすることが知られており、秋サケ未成魚が成育する北太平洋の環境収容力が、地球規模の環境変動で変化しているからだと考えられています。

秋サケの資源予測が科学的なデータに支えられている以上、予測の精度を高めていくために、わたしたちはもっともっと秋サケが生活する環境について学ばなければならないといえます。私は密かに今年の秋サケ資源予測がはずれることを祈っています。なぜなら、予測がはずれることにより、予測精度をさらに高めるための要望と機会が与えられるからです。

石狩川の魚道を見よう、考えよう（大雪と石狩の自然を守る会）

「石狩川に自然のサケを取り戻そう」と今年から始まった稚魚の放流。さけますセンターの試験事業が、大雪と石狩の自然を守る会や北海道サーモン協会の後援で始まりました。第１回の今年は３月に５０万尾が放され、旭川市民を始め関係者の大きな声援と期待が寄せられました。しかし、３年、４年後に大群を成して旭川に帰ってくる夢には大きな懸念がありました。

それは、途中の深川市に１９６４年に設置された「花園頭首工」と呼ばれるえん堤があるからです。このえん堤にはその後、魚類のそ上のための魚道が設置されました。しかし、その効果を調べるために行った２０００年～２００６年のデーターによると、魚道を通過したサケは毎年１０尾に満たない数でした。更に、その後の調査で、上ってきたサケがえん堤から魚道を通過して上れる割合はかなり少ないのでは、との疑念が強まってきました。このままでは、折角旭川を目指して上る大群も、故郷での自然の産卵の夢は消えてしまうでしょう。

このような状況から、専門家や市民が参加して「魚道を見て考えよう」の会を１０月１５日に開催することにしました。現地見学の後、魚道機能の検討や効果的な魚道についての検討会を行います。

この見学会は、「さけサポーターの会」として、大雪と石狩の自然を守る会が主催しますが、専門の立場から弘前大学東信行準教授も参加し、また、後援する立場から北海道サケネットワーク浦野代表、北海道サーモン協会木村代表も参加します。

古宇郡漁業協同組合に名称変更（泊村漁業協同組合）

２００９年４月１日付けで、古宇郡漁業協同組合に名称が変わりました。これは、漁協合併によるもので、泊村、盃、神居内の３漁協が統合したものです。これにより、盃漁業協同組合名の会員が泊村と統合することになります。

事務局便り

- 道立ふ化場河村場長から投稿を頂きました。ありがとうございました。
- 皆さんからも何でも結構です。情報、話題をお送りください。いつでもＯＫです。
- 今月３１日はネットワーク総会とサケ会議です。まだ出欠お申し出のない方はご連絡ください。